中国女文字調査報告

遠藤織枝

— はじめに —

中国女文字は、女性と文字、女性と文化のありようを考えさせてくれる非常に刺激的な存在である。さらに女文字自身についても十分に解明されていなくて研究の対象としても興味をそそるものである。

蓼科ワークショップでは、昨夏の現地調査の報告を行い、この女文字が日本の平仮名と女性のあり方を改めて考えさせてくれるものであることを述べた。

女文字が、漢字を与えられなかった女たちがおそらくは漢字をもとにしてつくりだしたものであることと、美しい文字が書けることがその女性のステータスを保証したことの2点は、平安時代の平仮名と日本の女性との関係と共通している。

平仮名の作り手については、現在の学界では男性説が有力[注1]で、女性は使い手としてのみ位置づけられている。しかし、吉沢義則がすでに60年前貴族女性にとっての和歌の重要性から考えて、その表現手段である平仮名の作成には女性の関与があったはずだと主張している（「平仮名の研究」1934）ように、女性が平仮名の作り手であった可能性も否定できない。

表現者として女性をみるとき、また中国女文字の作者の表現意欲を考えるとき、吉沢説に新たな光を与える価値はあろう、さらに吉沢説を裏づけるための研究や文献調査が必要であろう、との問題提起を行った。以下本稿では、そのワークショップの後の8月19日から10日間にわたって行った現地調査の報告を行う。

昨夏、現地－湖南省江永県上江墟郷周辺－を訪れた時は、女文字自体を知ること、その現状を把握することで精いっぱいであった。帰国後、聞き取り調査をまとめたり[注2]、関係の文献を読んだりしているうちに、新たな疑問が出

てきた。現存する唯一の完全な伝え手陽煥宜さんはことし85歳、今のうちに聞いておかないと聞けなくなってしまう。それに、上江墟郷から他郷へ結婚して出ていった人の中にはまだ書ける人がいるはずで、そういう人を探すにも早いうちでなければいけない。三朝書[注3]も探しだしたい。

これら新しい希望を抑えがたく、今夏2度目の現地調査を実施した。今回も清華大学中文系の趙麗明副教授と共同で行った。

― 女文字と現地の女性たち ―

8月21日から27日までの1週間、陽煥宜さんを訪ね、江永県上江墟郷内の村々と、隣県道県の江永県に接する村々を、歩き回った。そして村の人々に女文字を見たことがあるか、女文字の書ける人はいないかを尋ね続けた。

陽煥宜さんは、この春病気をしたとかで、去年に比べてずっと弱々しくなっていた。80歳を過ぎての病気はそれほど響くのかと驚くほど、1年前との差が著しかった。でも幸い頭脳は明晰で尋ねることにははっきり答えてくれた。一部去年と違う答えもあり、趙麗明氏が以前に調査して『中国女書集成』（清華大学出版社1992）に記載した内容とずれる点もあったが、何度も何度も同じような問いに答えているうちに少しずつずれてきたのかもしれない。60年前、70年前の記憶が不確かなのは仕方のないことだろう。

陽さんは14歳[注4]のとき、結交姉妹[注5]の1人陽干干さんと一緒に、興福村の義早早さんの家へ通って女文字を習った。

義早早さんは足が小さかったから[注6]あまり働けなかった。大きくもなく小さくもないとてもいい字を書いた。人に頼まれて書いてあげていた。他の村からも結交姉妹のとき、結婚のとき書いてもらいに来ていた。義さんは書くのを仕事としていた。

陽さんは、この義さんのところへ1週に1度、10日に1度ぐらいの頻度で習いに行った。1枚書いてもらうと400文払うことになっていた。そのお金は自分で働いて稼いだ。先生の手の動きを見ながら自分も書いて覚えた。たくさん文字があるので時間をかけて少しずつ習った。家に帰ってからも練習

した。練習しなければ覚えられないから自分で復習した。書きながら歌った。

1年ぐらい習った。[注7] 自分がかわいそうだから習った。たくさんのことを書いた。千々万々の苦しみがあった。

近くにいた同年輩の娘は習わなかった。実の姉も習わなかった。彼女たちは遊ぶ方が好きだった。

書けるようになって、他人に頼まれて書いたこともある。でも若いときは忙しくてほとんど書けなかった。

年をとって息子の世話になるようになって、暇なときは女文字を書いている。最近病気をしてから書けなくなっていらいらしている。

陽さんの話でわかることは、金銭をもらって女文字を書くという、書くことを仕事としていた人がいたこと、先生の義早早さんは漢族であったこと。女文字を覚えるにはかなりの努力が必要であること。女文字を書くことは老後の大きな楽しみであること、などである。

道県田広洞村に義娟女さん（76歳）を訪ねた。義娟女さんは、上手な書き手として知られていた義年華さん（1907～1991）の結交姉妹の1人だった。娟女さんは、義年華さんと一緒に、年華さんの伯母さんから1年ぐらい習った。年華さんはよく覚えて上手に書けるようになったが自分は十分覚えられなかった、という。やはり、女文字はだれでも習得できるものではなかったようだ。

同じ村の欧珠珠さん（75歳）は16歳のとき女文字を習った。歌を書きたかったから。7人で結交姉妹をしていたので、その姉妹たちと一緒に習った。年上の人が歌を書いた紙を見て字のまねをして書いて覚えた。歌は知っているので、その紙を見ればそれぞれの文字の音はわかった。だから形を見て覚えるだけでよかった。

道県大井村の鄧青珠さん（77歳）は、上江墟郷錦江村出身で、若い時は女文字が書けたが、村を離れたこちらへ来たので使わなくなり忘れた。結交姉妹が結婚するとき、書ける人に頼んで三朝書を書いてもらって、それを贈った。鄧さんが結婚するときも、4人の結交姉妹はそれぞれ書ける人に書いて

もらって、鄧さんにくれた。

女文字はコミュニケーションの手段として、女性にとって必要な大切なものであったが、文字が書けること自体が、すばらしいことであり、女文字そのものが非常に価値のあるものであった。だから女文字を書けない人は書ける人に頼んで書いてもらう。書けない人にとっても女文字で書いたものを持っていることは必要であった。女文字で書いたもの、書けること、文字自体、いずれもがこの地の女性たちの生んだ貴重な文化であった。

— 三朝書発見 —

上江墟郷内の村々の中でかつて書き手がいた村を訪ねてほかに女文字の書ける人はいないかと聞いて歩いた。興福村の入口にいた男性は、書ける人がいたが去年死んだ、他にはこの村にはいない、という。同じく葛覃村はかつては書ける人が多くいた村の一つだが、村の80歳の女性は女文字のことは知らなかった。

高家村へ行き、村の入口にいた数人の女性に上江墟から嫁いできた人はいないかをきき、女文字を書いたコピーを見せて、この文字のことを知っているか、と尋ねていたら、その中の１人が自分の家にある、と叫んで家へ向かって走りだした。村の中は密集しているから家も近いのだが待ちきれず追って行くと手に三朝書を持って戻ってきた。正真正銘の三朝書だった。趙麗明さんのコレクションとして見せてもらったことはあるが、現地でみるのは初めてだった。黒い木綿布の表紙、右上と右下の隅に赤い四角の布をあて太い糸で回の字のように綴じてある。中の紙は周囲はボロボロに破れているが、文字ははっきり読める。繊細な線で書かれた、小さく、形のいい文字である。

線の太さを美しさを測る尺度の一つとし、細い方を美しいとするなら、これは最右翼に位置づけられるだろう。趙さんも今まで上手な書き手とされていた高銀仙さん（1990没）、義年華さん（1991没）よりもいい字だという。この書き手は書くことを専門としていた人であろう、少なくとも100年はたっていると思う、とも言う。

持ち主は義中華さん（60歳、漢族）。義さんの話は以下のとおり。

この三朝書は、21、2 歳の頃、母の遺品を整理していてみつけた。母は自分の14、5 歳のとき40歳ぐらいで亡くなった。生きていたら90歳ぐらいだろう。母が自分で作ったのか、母の母からもらったものかわからない。母が女文字を書いているのを見た記憶はない。自分も見ても読めないが、母親のものだから役に立つだろうと思ってしまっておいた。

写真とビデオに撮らせてもらい、趙さんが字を書き写させてもらう間、義さんは、三朝書をもって行かれはしないかと心配でたまらなくなった様子。政府の役人が、これは貴重な価値のあるものだから、手放さないで大切に持っているように、と教えたかららしい。

本人が保存するのはいいが、あのボロボロの紙のままでは、いずれ朽ちてしまうだろう。

江永県に入る前日、長沙市の湖南省博物館で見た女文字資料は、薄い紙で裏打ちしてきちんと保存されていた。あのような専門家による手当てが早急に必要だと思うが、それを県政府はやってくれるだろうか。

― 日本軍侵略と江永県 ―

現地は、1944年 6 月から11月まで日本軍が侵略し通過していった地域でもある。女文字の作品の中にも、

日本の侵略軍はほんとにひどい／飛行機で空を飛び回り／省都も県城も爆撃し／いつも食べ物なくて腹は減り／頭ふらふら目ちかちか／食べ物探しに出かけた父は／侵略軍に殴り殺され／母はあわれや未亡人

（『中国女書集成』 P 298）

のような歌が残されている。

今回の調査でも、当時の記憶がたびたび語られた。日本人がこの女文字を調査研究するに当たっては、この事実は決して無視したり避けたりすることができない。

1990年に亡くなった高銀仙さんは、女文字で伝わったたくさんの歌を知っ

ており、それらを記録し残して、研究者たちの調査研究のよき協力者だった。

その高さんのことを聞くために、上江墟郷甫尾村に息子の胡錫仁さんを訪ねた。甫尾村はこの地を流域とする潇水の支流が一回りしてもとに戻る、つまり支流に囲まれた川の中の村で、そこへ行くには対岸の下新屋村で車を降りて橋か舟で川を渡ることになる。橋は八月初旬の洪水で流されてなく、渡し舟で渡ったのであった。

胡さんは瑤族であるが、母親は漢族で、てん足をしていたという。若いころは、暇なとき昔の人のいい行いなどを書いていた。黙って書いて、書き終わると歌っていた。年をとってからは、いつでも二階の明るい所で女文字を書いていた。父親は母親の好きなようにさせていた。母の結交姉妹はほとんど書けた。

高さんの作品の中に、日本軍侵略のことが書かれているが、ときいた途端、胡さんの表情が変わった。

姉が殺された、姉は16歳だった、落塘村に嫁いで３ヵ月しかたっていなかった。民国33年（1944年）10月だった。日本軍がやってきて家族はみな逃げたが、姉は逃げ遅れてしまった。強姦されそうになって反抗したので殺された。

日本軍は何度も来た。当時６～７才だった。来るたびに母に背負われ川を渡って逃げた。高い所の岩のかげに隠れたのを覚えている。上流の村で殺された人の死体が、たくさん川を流れてきたのも見た。この村でも１人の女性が強姦された。

飛行機もたくさん来た。朱家湾村では爆弾を落とした。下新屋村では機銃掃射で殺された人がいる。

胡さんはせきを切ったように50年前のことを語り続けた。

高家村で義中華さんの三朝書の話をきいていたら、年輩の女性がやってきた。この人も持っているかもしれないと、尋ねたら子供のころは家にあったが引越してくるときなくした、兄は日本軍に殺された、と言われ、次のことばが出なかった。

その他の村でも三朝書や女文字で書いた物をもっているかと高齢の女性にきくと、1つの答えは持っていたが紅衛兵に持って行かれた、もう1つは日本軍に焼き払われた、であった。

— 河渕村にて —

1週間炎天下を歩き回ったが、新しい書き手はみつからなかった。道県の新車郷では、江永県上江墟郷白巡村出身の女性が、白巡村によく書ける女性が2人いたが数年前に死んだ、と話してくれた。新車村で麦藁帽子を買いに入った小さな店の主人は、この村に女文字を書く人がいたが、今年4月に死んだ、と言った。上江墟郷興福村の朱積成さん（44歳）は、知人の母親で書ける人がいたが去年秋死んだ、という。

やはり書ける人はもう高齢になっているので、次々に亡くなっている。去年来たとき会っておけばよかったのにと後悔しきり。でも去年は去年で手いっぱいだったが……。

最後の日の午前中、陽煥宜さんを訪ね、去年よりひどく衰えているのにショックを受け、いよいよ女文字の寿命も残りわずかしかないのか、と悲観的になっていた。

午後は、最後の訪問先河渕村。ここは歌の歌える人がいるのと、女文字を織り込んだ帯を作れる人がいるので、最初から録音と撮影が目的であった。去年も来た所だ。趙さんも何度も来ていて、この村の女文字の状況はよくわかっているはずだった。

帯を織るところを見せてもらっている時、1人書ける人がいる、と教えてくれた人がいた。すわ、と、その人の跡を追って走った。何艶新さん(54歳)の家へ連れて行き、この人だ、という。まだ若い。半信半疑で話を聞いた。

何さんの話はこうだ。

10歳のとき母方の祖母に習った。祖母は上江墟の出身。祖父も科挙の試験に受かった人で、女文字のことをよく話してくれた。

祖母ははじめ娘である母に教えようとした。母は習いたくないと言って

習わなかった。私も習いたくなかったが、祖母の命令で仕方なく習った。

昼ごはんのあと、外の涼しい木陰で、歌と書くのを習った。祖母は歌いながら、筆で手のひらに女文字を書いて教えた。私はそれを紙に書いて練習した。一部分だけ書けるようになった。字は多すぎて全部は覚えられなかった。

習ったのは、解放のころで、その後習った字を使う機会はなかった。

解放後も歌は歌ったことがある。だれかの結婚式のとき上位歌（結婚式の一連の歌の１つ）を一緒に歌った。自分の結婚の時は、60年代の初めだったが、自分は新しい思想を持っていたから歌わなかった。

どの程度書けるか、書いてもらった。数え歌らしいものを歌いながら書きはじめた。何度も途中でつっかえていた。歌もすっかり忘れている。歌を思い出すと文字も思い出せるらしく、１句歌ったあとはその句を一気に書く。中に思い出せない文字があると趙さんと相談している。趙さんに助けてもらって思い出すとまた書ける。筆順は、漢字は篇→旁、と左→右、また縦の画が３本あるとき左→中→右か中→左→右だが、女文字は右→左、か中→右→左の順で、手の動きをみるとその独特の筆の運びはすぐわかる。何さんの文字も陽さんの手の運びと全く同じく、女文字独特の筆順である。

たびたびつまってはいたが、結局１から10までの数え歌を全部書いた。

いままで何人か少し書けるという人の書くのを見たが、その人たちよりはるかによく書ける。ただし、何さんは漢字も習っていて、この文字を陽さんのように生活の中でコミュニケーションの手段として使ったことはない。教養としての文字ではある。

それでも陽さんの文字を受けつぐことはできそうで、少し希望がわいてきた。

最後の夜の夕食会で、調査の最初から最後まで同行してくれた、江永県外事弁公室の陳国森さんにくれぐれも頼んでおいた。１つは陽さんの女文字を正しく記録しておいてほしい。陽さんが手すさびに書いているのは、好きな歌、気に入ったことばだけで、決まった範囲の文字しか使っていない。しか

し、陽さんの書ける文字はもっと多いはず、現地の土話の音をきかせ、それをどの文字で表現するか書いてもらう。そうして音と文字を対比させながら、陽さんの知っている女文字を全部残しておいてもらいたい。

2つめは、今回書ける人としてみつかった何さんの記憶をよびもどす手助けをしてほしい。陽さんの所へ連れて行って、うろおぼえの文字を確かめてもらう、また新しい文字を陽さんから習って陽さんの能力に近づけてほしい。

江永県政府には、この貴重な文化遺産のいくつかの謎が解明されるまで、ぜひとも保存や新しい調査に取り組んでほしいと心から願って帰国したことである。

注1　小松茂美『かな－その成立と変遷』（岩波新書、1968）、『日本語百科大辞典』（大修館、1988）など。

注2　「中国女文字紹介」（『ことば』14号）、「中国の『女文字』をたずねて」（『朝日新聞』1994.1.18 夕刊）、「中国の『女文字』発掘」（『総合ジャーナリズム研究』'94. 春季号）など。

注3　結婚した娘に、結交姉妹たちが贈る手製の冊子。結婚後3日目に贈るのでこの名がついた。

注4　94年9月20日放映のＮＨＫテレビ「謎の女文字を追う（94年5月現地収録）」では10歳から習い初めて10年ぐらい習ったと答えていた。

注5　血縁関係のない仲のよい女性たちが、義理の姉妹関係を結ぶこと。またその姉妹。

注6　てん足をしていた、ということ。

注7　ＮＨＫ番組では10年ぐらい習ったと答えていた。昨年尋ねたときも、10歳から20歳ぐらいまで、暇のときに習った、と答えていた。『中国女書集成』には14歳ごろから始めて3年ぐらい習ったと記されている。

記憶のあいまいさをただしたかったが、病後の衰弱した陽さんにはそれはできなかった。

（文教大学）